

筑波の銀杏並木

野津 憲 治（地殻化学実験施設）

紅葉の季節になると、多くの大学では構内の並木が色づき、その風情は大学ごとに独特な味わいをもっている。本郷キャンパスの銀杏並木は東大の代名詞になっており、落葉の銀杏並木は周囲の古い建物と調和して絵になる光景を作っている。私が昨年まで勤めていた筑波大学も、紅葉の美しさは東大に勝るとも劣らない。筑波は空気が冷めたく澄んでいるためか、赤や黄色の鮮やかな色彩がとくに印象深い。

私が筑波大学へ勤め始めた昭和51年は、筑波研究学園都市の建設の初期の頃にあたり、現在の完成された姿しか知らない人には想像を絶する環境であった。幹線道路ですら建設中で未舗装の所が多く、乾けば埃がひどく、雨が降れば泥でぬかるんだ。「ゴム長靴を履いて泥道を通った」と、その当時から住んでいた人たち同士の間で懐しんで語られる頃である。筑波大学では広いキャンパスの中に建物が次々と建てられ、学内のループ道路や歩道の脇に多くの街路樹が植えられた。そして、学内道路は植えられた樹の名前をとって「かえで通り」とか「すずかけ通り」とか名づけられた。細長いキャンパスの中央部近くに、小さな銀杏並木も作られた。しかし、植えられてから何年かは、紅葉の季節になっても、並木とまわりの環境とがそぐわず、何かとってつけた感じがして落ちつかなかった様な気がする。その頃の大学は、まさに建設の途上で、教育、研究、学内運営にわたって試行錯誤が続き、至る所で熱気に溢れていた。私自身は、質量分析装置など新しく設置された何種類かの分析装置を用いて、火山岩の起源の研究に没頭していた。

はっきりといつだったかは憶えていないが、何年か経ったある年、晩秋の厳しい冷え込みの翌朝にいつもの様にループ道路を通ると、紅葉の色彩がとても鮮やかで、周りの景色に溶け込んでいることに気づき、大いに感激した。遠くに筑波山を望み、大学の真新しい高層建築と色づいた街路樹とが実によく調和がとれているのである。その頃の大学はと言えば、創設期の熱気もさめ、ある種の落ちつきが現われてきていた。その後も並木は年々生長をつづけ、今や大人の風格をそなえつつある。

私は、筑波大学から理学部附属の地殻化学実験施設へ移った。この施設は昭和63年度で10周年を迎える。また、この施設が中心になって研究が行なわれてきた地震化学の分野が内外に認められるようになってから10数年位である。この分野が名乗りをあげ施設ができた当初は、周囲に対して熱気は充分伝わったであろうが、周囲から「筑波の銀杏並木」のような感じをもたれていたに違いない。しかし今やそのような時代はすぎ、一歩進んだ段階に踏み入ろうとしている。この分野がさらに発展するためには、創設期が一段落した次の10年に着実な進展があるかどうかにかかっているだろう。その中から、新たな「銀杏並木」を作っていくことが最も必要なのではないかと私は思っている。

理学部の皆様、今後ともよろしく願いたします。